

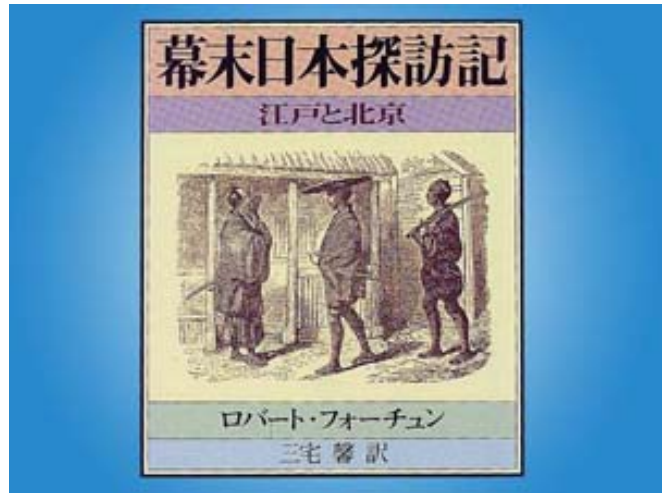
## アオキ・・・



8・9号棟に挟まれた通路脇に沿ってアオキが植えられています。この木は日陰でも土壌が悪くてもよく育ち耐寒性の強い常緑樹で、庭園樹として大変重宝がられています。でも、その存在が意識されるのは赤い実の映える冬の季節だけ。ちょっと可愛そうな気がします。

対生する大きな葉は常緑で、厚く光沢があります。その上に枝まで濃い緑色をしていることから、青木（アオキ）の和名が付いたと言います。日本原産で、学名「*Aucuba japonica*（アウクバ・ヤポニカ）」は「アオキバ」から、漢名は「桃葉珊瑚（とうようさんご）」、英名は「Japanese Laurel（日本月桂樹）」ですから、いずれもがその葉の特徴に由来していることとなります。その一方で、枯れると炭のように黒くなるのは何とも不思議な現象です。

ところで、アオキを巡って遠くイギリスに面白いエピソードが残されています。



まず、世界的に有名なプラントハンターであるロバート・フォーチュンの「幕末日本探訪記」（講談社学術文庫）から一部を引用します。

私の訪日の目的の1つは、イギリスの在来品種のアオキの雌木のために、雄木の品種を手に入れることであった。（中略）しかし、英国では、私が日本で見たように、この木に深紅色の果実がいっぱい実っているのを見たものは1人もいない。この木は雄花と雌花が、それぞれ別株を持つ植物の部類に属している。非常に珍しいことだが、ヨーロッパ産の本植物はみんな雌木で、従って果実不在なのである。

18世紀末、当初イギリスに渡ったのは、黄色い斑の入った種類の雌木だけでした。当然赤い実はできませんが、観葉植物として大変な人気を博したそうです。

やがて、「アオキが雌雄異株である」ことがイギリス人にも知られることとなります。そこで登場するのがフォーチュンです。彼は、一説にはアヘン戦争のフィクサー役を果たしたとも言われていますが、1860年に来日した彼は、アオキだけでなく多くの種類の植物を採集して本国に送ります。この時シーボルトにも会っています。こうして約80年を経てイギリスでアオキの赤い実が冬の窓辺や庭園を彩ったという話です。まさに長年の恋が実ったということになりましょうか。

花は毎年4～5月に咲きます。雌花（写真下左）は花柱の太く短い雌しべが1本だけ、雄花（写真下右）は4本の雄しべだけで、とても地味なので意識しなければ気づきません。どうぞ来春は気にかけてやって下さい。

